

三 朶 花

蘇 東 坡

【題義の原文】

房州通判許安世。以レ書遺レ予言。吾州有ニ異人一。常載三朶花一。莫レ知ニ其姓名一。郡人因以三朶花一名レ之。能作レ詩。皆神仙意。又能自寫レ眞。人有ニ得レ之者一。許欲下以二本一見上レ恵。乃爲作ニ此詩一。

【題義の訓読】

房州通判許安世、書を以て予に遺りて言ふ。

「吾州に異人あり、常に三朶花を載く、其の姓名を知ること莫し、  
郡人因つて三朶花を以て之に名く、能く詩を作る、皆神仙の意、又能く自から眞を寫す、  
人之を得る者あらば、許すに一本を以て恵まれんと欲す、乃ち爲めに此の詩を作る。」

【本文の原文】

學道無レ成鬢已華。不レ勞千劫漫烝砂。  
歸來且看一宿覺。未レ暇遠尋三朶花一。  
兩手欲レ遮瓶裏雀。四條深怕井中蛇。  
畫圖要レ識先生面。試問房陵好事家。

【本文の訓読】

「學道成ること無く鬢已に華、勞せず千劫漫に砂を烝すを、  
歸來且つ看る一宿覺、未だ暇あらず遠く三朶花を尋ぬるに、  
兩手遮らんと欲す瓶裏の雀、  
四條深く怕る井中の蛇、  
畫圖識らんと要す先生の面、試みに問ふ房陵好事の家。」

【字解】

- (一) 鬢已華……盧綸の詩に「去矣謝<sub>二</sub>親愛<sub>一</sub>、知余鬢已華」とある。
- (二) 烝砂……「首楞嚴經」に、「佛云若不<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>淫、修<sub>二</sub>禪定<sub>一</sub>者、如<sub>レ</sub>烝<sub>二</sub>砂石<sub>一</sub>、欲<sub>二</sub>其成<sub>レ</sub>飯、經<sub>二</sub>百千劫<sub>一</sub>、只是熱砂」とある。

(三) 一宿覺……「傳燈錄」に、「永嘉元覺禪師、詣<sub>二</sub>曹溪<sub>一</sub>、初到振錫、繞<sub>二</sub>六祖<sub>一</sub>三匝、卓然而立、須臾告<sub>レ</sub>辭、祖曰返太速乎、日本自非<sub>レ</sub>動、豈有<sub>レ</sub>速乎、祖嘆曰、少留一宿、時謂<sub>二</sub>一宿覺<sub>一</sub>」とある。

(四) 瓶裏雀……人身を瓶に譬へ、精神を雀に譬ふ、四條の條は繩の事、繩を以て人身を樹上に縛す。

(五) 井中蛇……繩が切られるれば身井に墮し、蛇に齧まるるのである。

(六) 房陵……「輿地紀勝」に「三花洞、在<sub>二</sub>房陵福溪巖下<sub>一</sub>」とある。

【題義】

房州通判の官たる許安世が、書を寄せて、房州に一異人ありて、頭上に常に三朶花を載く、衆人は其の人の名を知らぬから三朶花を以て其の人を呼ぶ、其の人詩も作り畫も作る。公乃ち詩を作りて其の事を言ふ。

【詩意】

道を學んで成就せざる中に鬢は已に華白となる、勞せず千劫の長き間漫に砂を烝すの徒爾を、歸り來りて且つ看る一宿覺の機敏なるを、未だ吾は遠く三朶花を尋ぬるの暇がない、戒定の兩手を以て身が心慾の爲め惱まさもるるを遮らんと欲するも、又煩惱の繩に縛せられ樹上に在つて怕るる井中の蛇を、畫圖を見て以て先生の面を識らんと思ひ、試みに之を房陵の好事家に問ふ。

【餘論】

此等の詩は所謂邪魔が公の胸中に入つて、公が平生の宗旨を紊亂したるもの、紀曉嵐は五六二句を抹殺し去るが、五六のみでない、一二の句も意義を成さず、一宿覺の如きも、方角違ひのものである。

【参照】『続國譯漢文大成 文学部 第十六卷 蘇東坡詩集 第三卷』 東洋文化協會 昭和三十三年発行